

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.11

篠原も変わる

浜松市は去る本年四月一日に全国十七番目の政令指定都市に移行した。私達の身近なところでは、住所に西区がついた。続いて五月一日には、鈴木康友新市長が登場。浜松市は更に変革期を迎えていると言えそうだ。

浜名湖花博開催平成十六年(二〇〇四)以来、とびうお大橋を渡った向こう側の開発は目を見張るものがある。それに引きかえこの篠原地区は、余り変化していないとの印象は拭えなかった。

しかしここへ来てようやく、篠原地区にも工事の槌音が聞こえてきた。浜松市総合水泳場と、浜松市西部清掃工場の建設本工事がそれである。二十年度中に完了予定のようだ。二十一年四月予定の日本選手権水泳競技大会開催が内定していると聞く。その一端を紹介する。

場所は篠原地区でも南東部、さざんか通り沿い、遠州灘海岸に面した両方合わせ約十畝の敷地を要する大プロジェクトである。

TOPIO古橋廣之進記念総合水泳場
国際公認五十坪十コースのメインプールの他に、二十五坪八コースのサブプール、国際公認飛び込みプール

を兼ね備

えている

上、屋内

レジャー

プール、

子供プー

ル、屋外

レジャー

プール、

更にジム

と健康増

進の“ア

クアライ

フ”を満喫出来そうだ。

浜松市西部清掃工場

安全・安定稼働、環境負荷の低減、最終処分量の極小化などを掲げ、最新式のシステム(キルン式ガス化溶融炉)を導入して環境に優しい清掃工場を目指している。

四百五十坪/日の処理能力とし、その余熱で水泳場の温水や冷暖房を供給する一体型の施設で、DH方式による運営という。

“アクアライフ”と“ピオトープ”

完成の暁にはこんな言葉がキーワードになっているかも知れない。

“アクアライフ”とは、水に親しむ生活と



でも言おうか、水の中に入り、競技力向上はもとよりレジャーに健康作りに楽しみである。

“ピオトープ”とは野生生物が息出来る空間という意味のドイツ語の造語であるが、計画では清掃工場の周辺に、人と生物が触れ合う空間を作っていくそうだ。森、水辺、原、花畑と違った環境に様々な生物が棲みつくり様を想像するに、清掃工場評価の指標になることだろう。これらを守るも生かすも住民の力

終戦以後、長年海浜公園の構想があったこの地に、地権者の皆さん達のご協力により、夢のある二つの施設が出来上がる。折角近くに出来るのだから、しっかり見守りながら大いに利用し、楽しみたいものだ。

平成 19 年度浜風会活動計画

- 身近な歴史を学び生涯学習の一助
 - 地域の歴史について自主研究成果を発表 [舞坂の松並木/道中記/藤田家と藩翰譜]
 - その他興味の湧くテーマについて話合い [漢字と仮名と文章等]
- 浜風会会報の継続発行
 - 年2回(7月:当号、20年1月)
- 山下孝先生の特別講座(19時~)
 - 5月24日(木):古代の浜松・伊場遺跡
 - 10月27日(土):中国の世界遺産から
- バス旅行
 - 山下孝先生案内バンピツアー参加
 - 9月6(木)7(金)日:別所温泉と海野宿等
 - 近郷の文化財巡り:目的地は後日計画
 - 11月11日(日)

藤田家(馬郡町)と ゆかりの文化人 其の二

前号で、旧家として知られる藤田権十郎家の祖先について、平安時代小野朝臣、本国は武蔵国(埼玉県)、時代を経て鎌倉、室町時代には、一國一城の城主として活躍したことを述べた。小生が最近出会った本に、江戸中期の新井白石が著した「藩翰譜」がある。その中に藤田家のことが書かれているので最初の部分を紹介する。

藤田能登守信吉は、畠山庄司次郎重忠十六代の後胤なり、元久二年六月重忠並びに嫡男重保父子は討たれし時、一男小二郎重秀は免れて、武蔵国秩父(六十六郷)、藤田(十二郷)二つの庄を伝領し、藤田右衛門佐重利が時に至りて鉢形の城に住して用土七郷の庄をも打ち従え、八王子、天神山等の城を構へて移り住む。関東の管領上杉にぞ属しける(藤田、太田とて上杉が下にて二人の大名といふ)。以下略

註 「藩翰譜」について

江戸時代の大名の系譜を新井白石が編纂したものの。正編十巻、付録二巻、凡例一卷。一六〇〇〜一八〇(慶長五〜延宝八)年の諸大名三三七家の伝記、沿革を記し家毎に系図をつけ、その来歴を述べたもの。一七〇一(元禄十四)年、

甲府城主徳川家綱(六代将軍徳川家宣)の命により編述し翌年完成した。

右に記した能登守信吉は、甲府の武田や上杉景勝、家康らに仕えている。大坂夏の陣の折、徳川方として大坂城攻めに参戦した。夏の陣後、同じ大坂城攻めに参戦した榊原康勝の老臣たちから、五月六日若江の合戦に榊原が手の軍勢が戦いに遭遇できず、戦功を立てられなかったのは、信吉の計らいによるものだと幕府に訴えられた。裁断は、信吉にも落度ありとされ改易となった。その間に信吉は死去した。その子息重夏は遠江国宇布見村に蟄居となった。なお重夏の母は、武田勝頼の兄、武田龍玉の娘と系図にある。

前号で藤田家ゆかりの文化人として藤田去草(俳人、国学者)、栗田高伴(歌人、国学者)を紹介した。

藤田松湖

(文政三年一八二〇—元治元年一八六四)
六代目権十郎の二男、名は三千郎。長じて宇布見村領家の藤田長十郎家(権十郎家の分家)四世卓兵衛の養子となる。大久保陣屋の代官服部伊賀守に仕え、代官として大久保(浜松市西区大久保町)に住んだ。勤めの傍ら画を福田半香に学び、画室を紫雲楼と称した。

画は山水、花鳥に秀で特に山水に長じていた。平井顕斎、椿椿山とは、義弟長尾華陽の師匠であったことから深い交わりがあった。当時椿山の揮毫を求める者の多くは、松湖の手を煩わしたと言われる。将来を期待されたが、四十五歳の若さで死去した。

長尾華陽

(文政七年一八二四—大正二年一九一三)
宇布見村藤田長十郎家四世卓兵衛の長男。名は正名。若い頃江戸に遊学して、大橋納庵に漢学を、巻菱湖に書を弘化元年(一八四四)より椿椿山に画法を学んだ。これは義兄に当たる松湖の影響が大きかったようだ。

帰郷後、縁あって吉田宿本町(豊橋市)の呉服商奈良屋作兵衛の養子となり、長尾華陽を名乗る。長尾家は旧舗で、藩の御用達を務めていた。明治三十年頃からは、湊町神明社の神官を務め、その傍ら画筆に親しんだ。

彼の画技は椿山の門下で正式に研鑽修得した規格正しいもので、その技法を固く守り彩色に優れていた。早期は山水もあったが、後年は専ら花鳥画を得意とし描いた。彼はこのように椿山の真蹟を周旋移入する力があつた。豊橋方面に椿山の作品が比較的多く残っているのも、彼の地域への貢献といえる。華陽自身の遺作画もこの地域に多い。九十一才の長寿で没した。

雨乞いの行事



昔から日照りが続く、雷神とか龍神（雨を司る神々）に降雨を祈る行事が、各地で行われてきた。

◇ 雨乞いのかたち

雨乞いをする時には、祈祷と鉦、太鼓をたたき、踊りをする形式が多く見られた。中世末からは念仏踊りも加わったりして、地域毎に様々な形態が見られるようになった。

◇ 篠原村で行われた一つの事例

鈴木七兵衛家文書（浜松市立博物館）の中で、

● 文政十年

当亥雨乞諸入用割帳

七月廿六日 東

● 文政拾年

去郡中当亥雨乞入用取立帳

八月 名主 七兵衛

右記の二つの文書を取上げてみた。文政十亥年（一八二七）に行われたものであるが、「去郡中当亥雨乞・・・」とあることから、幕府領敷知郡の各村で行われた雨乞い行事の一環として実施されたものと考えられる。

この年の干ばつの有無については、静岡県史、浜松市史を見る限り、それらしきものは見当たらない。保水能力の乏しい地域にとっては、日照りがいつもより長く続く、影響が大きく出るのは当然のことである。

『七月廿六日』とあるのは雨乞いを実施した

日ではない。この年を太陽暦から見ると現行の九月十六日にあたる（台風シーズンである）。

雨乞いはいもつと前に行われ、要した費用を村人に割当てたという日である。（篠原東の分）

『・・・入用取立帳 八月』とあるのは集金をした月で八月十五日（現行暦十月五日）頃からであった。

◇ 雨乞いの様子

雨乞いの行事は、村全体で費用を分担しているが、内容についてはよく分からない。が、祈祷をするにあたっては、幟を仕立てたり、竹、金紙などを飾りとして祈祷所を設けたらしい（支出費用に記載されている）。読経のあと、鉦や太鼓をたたいたり、踊りも加えたかも知れない。行われた場所は保泉寺、善養寺あたりかも知れないし、あるいは同時に両方の寺で行ったかも知れない。この両寺へ謝礼など複数の支出が見られる。

村以外として、浜松宿の竜禅寺へ一両近くが支出されている。祈祷に関係したものの謝礼であろうか。また、取立帳の中に普大寺という寺名が出てくるが、記載の内容を見ても村との関係が分からない。

「普大寺は菅原にあった普化宗の寺で虚無僧がよりどころとしてきた寺であったが、明治四年の太政官布告によって廃宗、廃寺となった」

◇ 村人の費用の負担

費用の割当は、村人の持つ石高に応じて一石あたり二十三文、門あたり平均して二十三文（三百三十六軒に対し）及び新田にも少額ではあるが負担をさせている（七十二軒に対し）。

寺も負担して、例えば保泉寺は百四十九文、万松院は百六十八文、宝積寺百十五文等である。銭の納入は五人組の組頭からの記載がある。一例を示すと五郎兵衛組は五百十五文を納めた。

この組は五郎兵衛他、小右衛門、七蔵、源吉、惣右衛門の五人であった。石高に応じた額と、新田所有者三人が出した額、及び門として五人とも二十七文ずつを出した合計である。平均して一人が百三文で村全体でも平均に近い額である。

村入用（村の運営経費）の負担「文政十二年ではこの組は一人あたり平均で五百六十文」に比べ、約五分の一である。しかし前年の文政九年にも似たような規模で雨乞いを行っているから、毎年の年貢や村入用の納入の他に臨時の雨乞い費用としての支出が続いたこととなる。

◇ 雨乞いを行った村々

篠原村を含む幕府領の村々が行ったと思うが、この年のことは分からない。後年、文久元年六月の舞坂宿の記録『雨乞い入用七ヶ村・・・』がある（舞坂町史資料編八）。篠原、坪井、馬郡、舞坂は数えてよいと思うが、後の三ヶ村は指摘をしない。

歴史メモ4

自己満足の生涯学習

会員 鈴木 清

玉葱の収穫が終わり、甘藷苗の植付と忙しい毎日です。暇を見つけて郷土史の調べをします。この時は心が安まります。

昨年の大河ドラマ「功名が辻」の解説書に、主人公お千代さんのことが、新井白石著『藩翰譜』に載っていることを知りました。調べたくて浜松中央図書館へ行き、受付で検索してもらったら数冊があり目を通しました。お千代さんのことは見つかりませんが、諸大名の中に、わが町の藤田家の「先祖のことが書かれているのを見つけました。興奮し一気に読み通しました。こうした出会い発見は、時折り経験し

ました。

郷土史の学習を始めたのは、二十年程前、篠原小教頭山下孝先生(かつて雄踏中で一緒に勤めた関係)から、篠原地区の『わが町文化誌』を作るからと、退職間もない私に誘いがあったのが縁です。以来、学生時代に求めても読むことのなかった『遠江風土記伝』を、必要に迫られ読みます。また、図書館で調べるなど、郷土のことに関心を持つようになりました。

最初に調べたのは、弁天島の北に在ったといわれる永里郷のことでした。次に馬郡町旧東海道沿いに建っていた観音堂です。今は老朽化のため取り壊されてないが、このお堂と思われることが、鎌倉時代の『東関紀行』に載っています

す。篠原地区では、文献に登場する最も古いものだと思います。

幕末から明治初期にかけて、篠原地区の行政の変遷を調べて、庄屋(名主)、村三役、五人組のこと、天領、藩、旗本領のこと、明治以後村役場ができるまでの戸長、戸長役場等、新しく知ること視野が広がります。

こうした学習は、浜風会二十余名の仲間と月二回の相互発表と話し合いで行われます。脱線した雑談もまた楽しいものです。

テーマについて調べたい課題は、主に図書館です。百科事典、国史大辞典、府県別知名事典、郷土史コーナーなどを利用します。

そして課題が解決出来たときは嬉しく、満足感を覚え、また新しい課題への夢と意欲が湧いてきます。

講(こう)について

宗教、経済、社交上の目的を達成するために組まれた集団で、講の名をつけて呼ぶ。

中世から近世を通じて発達した金融組織に、頼母子講、無尽講がある。無尽の基本は共同の出資者が決められた会合日に出資物を持って集まり、抽選または入札によって順次に財物を得ていき、会合が一巡すると各出資者は平等に出資と同額の財物をしたことによって、その無尽は完結する。

寺社に参拝する講には、伊勢講、秋葉講、豊川講、半僧坊講などがある。

他に庚申講(こうしんこう)、日待講も知られている。中国の道教による話で、体内にいて悪さをする三尸を殺してしまえば問題は解決するが、それには五穀断ちなどの、厳しい修行が必要である。ならば、庚申(かのえさる)の日の夜は一晩中起きていて、三尸が身体から出て行かないよう見張っていればいいではないか。ということで始まったのが庚申講である。庚申講は平安時代に中国から伝わり、江戸時代に各地で隆盛を極めた民俗信仰で、一晩中起きていて何をするのかは、各地の伝統に従って行われていたようだ。(以上東京庚申堂より)



こうした講も、最初は確にお経を読誦して、もっぱら供養に心がけたと思われる。娯楽のない時代の一つの機会であり、情報交換の場ともなったが、いつしか本質が忘れられ飲食の時となっていた。

交通が発達し数多くの楽しみがある昨今、少しずつ変貌をとげながら、伝統的なこうした行事は失われつつあるのも事実である。

浜風会会報第11号
浜松市篠原公民館同好会「浜風会」
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
編集委員 委員長 鈴木清
鈴木義雄 鈴木幹久 中山清 山下勝彦
発行責任者 山下勝彦
発行平成19年7月1日
連絡先：篠原公民館気付
TEL053-448-7859